「カーテン」2018.10発行 (c)2017 夜明けの風

１.

都会での一人暮らしは寂しい。
窓から見えるネオンは、その気持をより盛り上げてくれるだけにしかならなかった。
窓に映る自分をみないようにしながら、
リサは今週中までに仕上げなくてはならないレポートを書いていた。
このレポートを出したら、しばらく旅行に行こう。
車でこの町を出て、誰も知らないところで、のんびりしたい。
大学３年生になるリサは、学校が始まると毎日のようにレポートと宿題に追われていた。

大学卒業したら、カリフォルニアかマサチューセッツで就職したい。
それまでテキサスでの生活は、もうしばらくの辛抱だ。
とにかく。コーヒーを口につけて、リサはレポートにとりかかろうとした。
すると、カーテン越しの窓の向かい側が明るくなった。
ふと顔を上げる。カーテンをちらっとめくって窓の外を見た。
窓の向かいには、もうひとつマンションがあり、同じ高さで窓がついている。
カーテンをしなければ丸見えだ。
夜は電気を薄暗くして過ごすことが多いから、気にはならなかった。
向かいに引越ししてきた人がいるとなると、こっちの様子もきっと気になるに違いない。
前の住人が引っ越してから随分時間がたつ。
聴くところによると、向かいのアパートはここの家賃より高いんだそうだ。
アパートひとつ隔てるだけでこんなに違うなんて。
アパートに一人暮らしできるようになったのも、
今の学校の成績のおかげで、親から一部仕送りしてもらっている。
引越ししたたての頃は、騒がしいけれど、そのうち落ち着くだろう。
こんな夜に引越しというのもあまりないとは思うが。

2.
朝いつもどおり目がさめて、カーテンをあける。
向かいのアパートの窓が開いていることに気付いて、はっとした。
そうだった。昨夜引越してきていたんだ。
窓を開けたが、閉めた。
きっと向こうも気にするだろう。
同じ高さの窓が向かいにあるのは、なんともやりにくいはずだから。
前の住人は、朝から窓全開にして、こちらのことはおかまいなしだったが・・・。
朝から聞こえてくる声としては、あまりよいものではなかったが、窓を閉めておけば問題ないはず。
リサは窓を閉め、レースのカーテンだけをしめておくと、朝食にとりかかった。
向かいの新住人は、まだ姿を現さない。
ライトは消してあるから、きっと誰かが消したはず。
昨夜はついていたのだから。

朝食のパンをかじりコーヒーを飲むと、カバンをつかみ学校に向かった。

帰宅。
いつもどおり、夕食を食べた後、レポートにとりかかる。
真向かいのお隣さんは、電気が消えたままだ。きっと出かけているのだろう。
それよりも、とリサは学校で出された宿題を広げて、頭を抱えた。
これは時間がかかりそうな宿題だわ。
さっさととりかからないと。
リサは宿題とレポートに取り掛かった。

3.

それから7日後のことだった。
隣の変化に気付いたのは。

夜、帰宅したときのこと。
この日は、バイトが忙しく、ぐったりしていた。
このまま眠りたい・・・
新しいレポートが入り、それを早々に終わらせたかった。
―とりあえず、シャワーでも浴びよう。
そう思ったとき。

真向かいのアパートの窓に電気がついていた。
リサは横目でそれをさりげなく確認する。
分厚いカーテンではなく、レースのカーテンだけの窓からは、隣の光とシルエットがしっかりと見えた。
幸いなのは、こちらは電気をつけていないので真っ暗だ。ということだった。

だから向こうからは見えないはず。
とは思っていたものの、少し不安になる。
そんな不安をよそに、向いの部屋は電気がついた。
窓には、ひとつのシルエットが浮かびあがった。

男か女か。
シルエットだけではわかりにくい。
そのとき、影がもう一つに増えた。
窓にはカーテン越しでふたりの人間の影が見える。
夫婦なのかそれとも恋人同士なのか。
影を見た感じでは仲が良さそうだった。
ふたりの影が重なったかと思いきや。

と、その時。その様子に違和感が。ひとりの影が、窓から消えた。
まるで、倒れるかのように。

なにかみてはいけないものを見たような気がする。
ぼんやりとしていると、携帯電話の音でハッとした。
音の合図で、逃げるようにリサは部屋を出た 。
―レポートを仕上げてしまおう。
リサはカーテンをそっと閉めなおした。

4.

翌朝。
隣の部屋が見える窓にいくと、向かいの部屋は窓とカーテンが締め切ったままだった。
リサは、不安になった。
昨日のことはなんだったんだろうか。
たまたま、しゃがんだだけかもしれないし。
でも・・・。と時計をみると、慌てて部屋を飛び出した。

帰宅後からさらに１週間たっても、向かいの窓から人が写ることはなかった。
やはり見間違えだったような気がする。
そもそも、疲れていた時に見たから、あまり確信を持てなかった。
あのままもし警察沙汰になっていたら、連絡するつもりではあったが・・・。
特になにもなかったので、リサはいつもどおり過ごしていた。

ところがあのシルエットを見てから２週間後。
再び、窓辺に人影が写る。
その人影をみたとき、リサは違和感がよぎった。
今までとちょっと違うような気がする。
なぜだかわからないが、影になにかしら変化を感じるのだ。
こう、自分をみているような、見ていないような・・・。
気にし過ぎかもしれない。

影はこちらに顔を向けているのか、それとも背中なのか。
リサの方からはわからない。
でもこちらをチリチリとみているような、そんな気がしてならない。
リサは教科書をたたむと、別の部屋に移動した。

5.

リサにはひとつだけ気になっていたことがある。
それは、いつから向かいの人が住んでいるか。ということだった。
気づいたのは部屋に電気がついたとき。
そのときに人影は見えなかったけれども、電気のオンオフがあったのだ。

それからなにもなくて、ここ１週間くらいで、人の出入りがるような気がする。

向かいの事情はわからない。同じアパートではないから。
人が住んでいるような、住んでいないような。
それがとても不思議に感じる。

―ここに住むのも残り数週間。平和に過ごしていきたい。

その後、残り数週間の間、リサはなにも変わりなく過ごした。
太陽が昇り、日が沈む。
それにあわせてリサは、学校の宿題を終え、そして次のレポートに進んだ。

―あと少しで学校も終了する。そうすれば・・・。

リサはひたすら目の前のことに集中した。

6.

太陽が昇る頃、リサはついにすべてのレポートと宿題を終えた。
―これでやっと大学３年の夏を迎えられる。
リサは、最後のレポートを机に置き、深呼吸をした。
教授にこれを渡せば、あとは夏休み。
―長かった。これでもうなにも残すことはないのだから。
目を閉じてその喜びをかみしめる。
キッチンにあるコーヒーマシーンが、こぽこぽと自動でコーヒーをいれはじめる。
こおばしい香りがキッチンから、リサのいるところまで流れてきた。
目をあけると、向かいの窓が真正面になる。
レースのカーテン越しには、向かいの家の窓が空いているのをみた。
向かいの人は、やっぱり住んでいたのか。
リサは、安堵した。
そしてそっと窓に近寄り、窓を開ける。

窓を開けた時、グラグラと地面が揺れる感じがした。
―地震？
その揺れは大きくそして、リサの体ごと激しくゆらす。
―な、なにが起きているの？
当惑した顔をしながら、倒れないように必死に窓枠に手をつける。
揺れは続く。
すると真向かいの窓から、人が現れた。
その人は、ただリサを見ていた。
まるで何事もなかったように、たっていた。
リサは、自分が必死で揺れから逃れようとしているのに、目の前の人はなにも動じずに立っていることに、
不思議に思うと同時に、次第に苛立ちはじめた。
―なぜあの人は平気なのだろう？こんなに激しく地震が起きているのに。
窓辺にたちながら、リサは必死で揺れから身を守ろうとした。

しかし揺れは一向に収まらない。
アパートが倒壊してしまうのではないか。と思うくらいに激しく。
そして、最後の大きな揺れがやってきたとき、向かいの人は言った。
「もういいだろう？」
その瞬間、リサは思い出した。
そして、目の前が白く光り、包み込まれた。

～エピローグ～

眠らない街・トウキョウ。
人が行き交うその街は、眠りを知らない。
太陽を背にし、トウキョウの空を２羽の鳥がどこからともなく、飛んできた。
近くの屋根に降りると、鳥たちは睨みあうように向かい合った。

「あれでよかったの？」
赤い鳥が、言った。
「あのまま気付かなかったら、どうしようかと思ったんだが」
真っ黒い羽に金色の羽が混じった鳥が言う。
「もう少し早く解決できたんじゃない？」
ぶーっとふくれたような表情をする青い鳥。
「私たちが、手出しをするほどでもなかった。」
「ま、やり残したこともやれたみたいだし。あれで、一件落着でしょ」
赤い鳥と黒い鳥の姿はきえ、かわりに黒い服を来た黒髪の長身の男性と、赤い髪の女性が姿を現した。
「これで、あの家の住人も幽霊騒動からは落ち着くんじゃないかしら」
「そうだな」
ふたりはオレンジ色と水色に染まった空を見上げながら、呟いた。
あ！と赤い髪の女性がいう。
「ところでさ、報酬はどうなったの？あの幽霊退治したんだし。」
「報酬はそのうち届くさ」
えー？！と抗議の声をあげる赤い髪の女性。
まあいいけど。届いたら早くお礼頂戴よ、と呟いた。
(完)
「カーテン」2018.10発行　(c)2017 夜明けの風
著）佐藤ゆずは　https://sea8duskyromance.jimdo.com/